

主な田端 文芸芸術家たち



芥川龍之介 書斎風景

さ行

斎藤 佐次郎(さいとう・さじろう) 明治26年(1893)～昭和58年(1983) 編集者・実業家
東京都台東区出身。大正9年頃、田端351(現1-15)番地に転入。その前年に児童雑誌『金の船』(のち『金の星』)を創刊、田端の自宅に編集所を置き、自ら執筆(翻訳など)にも関わった。不遇だった野口雨情を「金の船社」に迎え、作品発表の場を提供する。その後も長年にわたって児童文学振興に尽くした。現「金の星社」創設者。

斎藤 素巖(さいとう・そがん) 明治22年(1889)～昭和49年(1974) 彫刻家・洋画家
東京都新宿区出身。大正5年、田端105(現3-20)番地に転入。北村西望、建島大夢、吉田三郎らと交流。渡欧しロンドンで彫刻を学ぶ。昭和元年、日名子実三らと「構造社」を結成。帝国美術院会員。



佐多 稲子(さた・いねこ) 明治37年(1904)～平成10年(1998) 小説家
長崎県出身。大正15年、駒込神明町に下宿。幼少期から貧困と数奇な環境からか厭世的人生を送るが、女給として勤めたカフェー「紅緑」で『驢馬』の同人らと知り合い、人生、文学両面で開眼。のち、同人の一人窪川鶴次郎と結婚する。左翼運動に身を投じ活躍。女流文学賞、川端康成賞などを受賞。



サトウ ハチロー(さとう・はちろう) 明治36年(1903)～昭和48年(1973) 詩人・小説家
東京都新宿区出身。正岡子規門下の佐藤紅緑の長男として誕生。大正9年頃、福土幸次郎宅田端543(現5-7)番地に寄宿。西条八十に師事し、児童雑誌『金の船』などに童謡を発表、詩壇に地位を確立。昭和初期から、菊田一夫らと浅草軽演劇の台本を書き、『りんごの唄』、「長崎の鐘」などの歌謡曲にも筆をそめる。北区立滝野川第四小学校の校歌を作詞した。作家・佐藤愛子は妹にあたる。

四賀 光子(しが・みつこ) 明治18年(1885)～昭和51年(1976) 歌人
長野県出身。太田水穂夫人。大正8年、田端283(現1-12)番地に居住。府立第一高等女学校で教鞭をとるかたわら『創作』に歌を発表。『潮音』(太田水穂主宰)創刊と同時に同人となり、水穂没後主宰となる。宮中歌会始選者などを務める。

清水 敦次郎(しみず・あつじろう) 明治37年(1904)～昭和37年(1962) 洋画家
新潟県出身。昭和元年、田端513(現3-24)番地にアトリエを築き転入。文展、帝展、太平洋画会で活躍。空襲でアトリエを焼失、木曾三岳村に独居して創作活動を続ける。木曾で描いた「水車への流れ」は戦後の第2回日展の特選、政府買い上げとなる。



下島 勲(しもじま・いさおし) 明治3年(1870)頃～昭和22年(1947) 医師・書家
長野県出身。明治40年、田端348(現1-15)番地に「楽天堂医院」開業。陸軍軍医として日清・日露戦争等に従軍。田端鉄道病院の嘱託医師を勤める。開業後、多くの文芸芸術家たちと交遊、「道閑会」の主要メンバー。芥川龍之介の主治医として最期をみとる。雅号・空谷(くうこく)。